琉球大学学術リポジトリ

八重山古謡にみる雨乞い思想

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2015-12-09
	キーワード (Ja): 雨乞い, ニガイフチィ(願い口), 雨乞い歌,
	パイナーラの島, 雨の神
	キーワード (En):
	作成者: 山里, 純一, Yamazato, Junichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32867

八重山古謡にみる雨乞い思想

山里純一

Rainmaking Songs of Yaeyama in the Ryukyus

Junichi Yamazato

要旨

八重山諸島には雨乞い儀礼に関するニガイフチィや雨乞い歌が数多く残っている(1)。その内容も豊富で、往時の人々が降雨を何にどのように祈願していたかがわかる貴重な資料である。雨乞い歌の基本的な構造は変わらないが、雨に対する観念は村によって若干相違が見られる。ニガイフチィや雨乞い歌に見える祈願内容には、雨をどのように認識していたか、また雨が降らない理由や降雨に至るプロセスなども織り込まれていて、往時の人々の雨に対する考えを知ることができる。

キーワード:雨乞い ニガイフチィ(願い口) 雨乞い歌 パイナーラの島 雨の神

はじめに

雨乞いの時の唱えことばや歌謡として、沖縄本島にはオモロ、ウムイ、オタカベ、ミセセル、クェーナがあり、宮古諸島ではニィリがある。八重山諸島ではニガイフチィ(願口)またはカンフチィ(神口)と称されるものと雨乞い歌がある。ニガイフチィとは神ツカサが神に対して願意を唱える呪詞である。カンフチィは神の言葉という意味である。また雨乞い歌は旋律を伴うもので、儀礼の中では御嶽の境内と、ある場所からある場所へ移動する時の道歌として謡われることが多い。一般には「雨乞チィジィ」と呼ばれるが、チィジィとは頂で、神を頭上に押し戴いて心から降雨を乞い願う意味の呼称である。「雨乞チィジィ」のジャンルの位置づけは不統一で、地域によってはユンタと言ったり、アョウと言ったりしている。ニガイフチィと雨乞い歌は内容を見る限り、その区別はつきにくい。口頭で唱えるか、旋律に乗せて謡うかの違いだけで、少なくとも活字化された歌詞のみを見る限り、その内容に大きな差はない。ただ雨乞い歌の特徴として、「アーミユタボウレ」「アミ プシヤヌ」という囃子が各節の最後に繰り返されることが挙げられるが、囃子のない雨乞い歌もある。逆に、こうした囃子はニガイフチィにはない。

八重山地方にはそうした雨乞いに関するニガイフチィが平得、大浜、宮良、白保、伊原間にあり、雨乞い歌は、石垣島の四か(石垣・登野城・大川・新川)、平得、大浜、宮良、白保、川平、離島では、竹富、小浜、鳩間島、黒島、西表古見、与那国に残っている(1)。年中行事として行われる波照間島にも複数の雨乞い歌が伝えられている。本稿では、雨乞い古謡を通して、往時の人々が考えた雨の観念および祈願対象の神々などについて検討していきたい。

1. 雨乞い歌の構造

各村の雨乞い歌は大同小異と言ってしまえばそれまでであるが、基本的な内容は おおむね次のようなっている。

- ①祈願対象(神の名)
- ②実情
- ③神の怒りを和らげる
- ④降雨に至る過程
- ⑤降雨地点
- ⑥雨の降り方
- ⑦雨の降る時間帯
- ⑧期待する降雨量
- ①については、例えば大川の「雨チィジィ」では次のように始まる。

大石垣タルファイ

大石垣御嶽のタルファイ神

クバントイヤナシィ

イヤナシィ御嶽のマルファイ

タンディトゥドゥ

雨を給わりますようお願いします

タルファイ神様よ

ガーラトゥドゥ

タルファイ

極上のお願いを申し上げます

小浜島の「雨乞い歌」では、

いつやまぬ うやかん

五山の親神

ななやまぬ まもるそー

七山の守る神

と、冒頭に祈願する神の名が登場する。

各地の雨乞い歌の中には、必ずしも神が冒頭に出てこないものもあるが、どのような神に雨乞いを祈願しているのか、呼び出す神を整理すると次のようになる。

(表1) 祈願対象の神々

村名	村内の神	村外の神
登野城	御嶽の神	真南蛮の神 龍王、大権現
石 垣	│ │ 宮鳥御嶽の大神	110 - 1 7 110 70
大川	大石垣御嶽のタルファイ	
大浜	山々(御嶽)の神加那志	小波本御嶽のイヤナス ンジャヌク(獄名ヵ)マルバイ
宮良	うふかん (大神) まぶるんがん (守護神)	
白保	〈新生の〉雨の主・水の主	
川平	山(御嶽)うふかん(大神)	
	イビの親神	
竹富	御嶽の神	小波本御嶽のイヤナス
	海の神	大石垣のマルファイ
小 浜	五山(御嶽)の親神	
	七山のまもるそう (守る神)	
黒島	うふがん(大神)	
	守る主	
鳩間		海底の竜加那志
古見	山々(御嶽)の神	·
与那国	御嶽十山杜の神	
	水の神(島内)	
多良間	御嶽の神	天加那志

②は、宮良「雨乞チィジィ」では次のように見える。

ミスキピヤイバヒイド

三ヶ月も旱魃しているので

アミフチャヌ

雨が欲しい

ムムガピヤイバヒイド

百日旱魃しているので

アミフチャヌ

雨が欲しい

また黒島の「雨乞の唄」(『南島歌謡大成』Ⅳ八重山篇)では、

我黒島や 干島やりば

我が黒島は干島だから

五日早魃 芋のはざ枯るん 五日の日照りで芋の葛が枯れる

七日早魃 豆のはざ切るん 七日の日照りで豆の葛が切れる

とある。

③は、川平の「雨乞いユンタ」に、

タンディトウドゥ 親神 ガーラトウドゥ 大神 バンバラサ アラバン 兄 ザラサ アラバン 人人間ヌ 育チィヤ 雨サーリド育タリ

どうぞどうぞ大神 私どもが悪くても 先輩が悪くても 人間の育ちは 雨でこそ育つ

どうかどうか親神

人兄ヌ 胴持チヤ

人間の体の持ち(保ち)は

水サアリド 身ヤ持チャリ

水でこそ保たれる

とあり、神に自分や先輩たちが悪かったことを認め詫びた上で、人間にとって雨が不可欠であることを訴えている。なぜ自分たちが悪かったと言っているのか。宮良の「スバンガーニカンフチィ」には次のようにある。

ナユトゥガミドゥ アミタボーラヌ 何の科があって雨が降らないのか イカトゥガミドゥ ミジィタボーラヌ いかなる罪があって水が無いのか ここでは、神にどういう科(罪)があって雨を給わらないのかと聞いている。こ のことは逆に言うと、雨が降らないのは天の神が人間の犯した罪に怒っているから ということである。神が怒っている理由を知り、そして人間が罪を認め謝ることに よって神の怒りを和らげ、雨を期待する気持ちを表していると言えよう。

与那国島の雨乞い歌にも、

タシキヤヒリ 神ヌ前

救い恵み給え 神の大前よ

人間生リヤ 物ンチャヌ

人間という者は 神意を知らぬ

とあり、人間は物を知らないというのも、なぜ雨が降らないのか人間が神の神意を 知らないことを伝えるものであろう。

- ④は雨乞い歌の中で最もバリエーションがあり、人々の雨に対する観念を知る上で興味深い部分であるため、次節で検討することにしたい。
 - ⑤は、例えば宮良の「雨乞チィジィ」では、

ウイタバルヌ ウイゲタボリ

上田原の上に恵んで下さい

スムタブルヌ ウイゲタボリ

下田原の上に降って下さい

バリバリゲ タボリ

窪地に恵んで下さい

トートーゲ タボリ

低地に降って下さい

と謡われる。

- ⑥は、だいたい共通していて、「ドゥルドゥル」「ゾウルゾウル」「ザーラザーラ」など、雨の音を連想させる語である。似た音を言葉にしたり、謡うことによって沛然とした雨を期待する類感呪術である。
- ⑦も、「今日の夜中に」「今日の夜の明けるまでに」と、祈願したその夜には降雨のあることを期待したものがほとんどである。
 - ⑧は、鳩間島の雨乞い歌(『鳩間島誌』)に、

むるむるぬ とぅーなるけー

岡々が渡(海)になるまで

とうーとうーぬ いきなるけー ぱまかざば うしうるし いんぬりば ぴきうるし まいぬとうーぬ やのーるけ にしぬとうーぬ やのーるけ

低地が池になるまで 浜葛を押しおろし のり(海苔)を引きおろし 前の渡海が濁るまで 北の渡海が濁るまで

と、降雨によって生じる現象を示す。

以上の構成要素をすべて満たす雨乞い歌は伝承されてないが、比較的多くの要素 を含んだ西表島古見の「雨乞い歌」を挙げよう。

- 1. クンヌユーヤ アミドユー ミユスクヤ ミヅィドユー 〈アミ プシャヌ〉
- 2. アミドユー ヤリシィテ ミズィドユー ヤリシィテ
- オコトガミ ヤリバド
 イカトガミ ヤリバド
- 4. ナユトガミ ヤラバン イカトガミ ヤラバン
- 5. ヤマヤマヌ マイナ ムルムルヌ マイナ
- 6. バガ クユキ シサルバ
 クリ マヌキ シサルバ
- パイヌ シィマカラ アマダキヌ ウイカラ
- ヌリフムヌ タツゥン シルフムヌ タツゥン
- 9. クリド アミヤル カリドゥ ミズィヤル
- バガクユク ニカカラ
 クリマヌク ユウカラ
- 11. タバルカズ ウイナガ マシィカズ ウイナガ
- 12. ドルドルシ タボーラレ
 ダラダラシ タボーラレ
- 13. ウフナブシ ウチコーン インジムル ウチィカイシ
- 14. マイヌトゥーン アカマシ

古見村の人々は何としても雨が第一です 美与底は水がなければ生活はできません

どうしても雨が降らないので 水が欠乏してしまって困っています どういう理由で怒っていらっしゃるのですか 如何なる訳で私達を見捨てられたのですか

どういう理由があっとも 如何なる訳があろうとも すべての御嶽の神様の前で 諸々の御嶽の神様の前で 私達が類がきお招き申し上げたら へのおが古里の島から 本国である親国の島から 来り雲が棚引いて来る 白雲が棚引いて来る

白雲が棚引いて近づいて これがほんとの雨です かれが待っていた雨です 私達が乞い願った夜から お招き申し上げた日から 田原の数々の上に 枡々の真上に

ごう然と音立てて雨を降らせて 沛然と降る雨もよどみなく 大きな畦もふみ越えて

石のように固かった田もすき耕して 前の海も赤色にまでなして下さい

フイシィマトゥーン ミジナシ 黒島の前の海までもその色に変えて下さい この内容を整理すると次のようになる。

②実情

雨が降らず、水が欠乏していて困っている

- ③神の怒りを和らげる
 - ・なぜ怒っているか、いかなる理由で見捨てたのか、
 - どういう理由があろうとも、いかなる訳があろうとも
- ④降雨に至る過程

南の島から雨となる雲が近づいてくる

⑤降雨地点

数々の田原(枡)の上

⑥雨の降り方

「ドルドル」「ダラダラ」

- ⑧期待する降雨量
 - 田鋤ができるまで
 - ・前の海が赤く染まるほど

もう一例、川平の「雨乞いユンタ」も挙げよう(2)。

- 雨プサシ カシュリバ 水プサシ カシュリバ 〈イーアーミプシャーヌ〉
- 2. 日干シ カシュリバ カラ吹シ カシュリバ
- 4. 山々ヌ 大神 イビイビヌ親神
- 5. ヨシトモ タチョリバ ョシブナチン トゥリバ
- キジャ骨ン ヤミネヌ ムム骨ン ヤミネヌ
- 7. タンディトウドゥ 親神 ガーラトウドゥ 大神
- 8. バンバラサ アラバン 兄ザラサ アラバン
- 人人間ヌ 育チィヤ 雨サーリド育タリ
- 10. 人兄ヌ 胴持チヤ
 水サアリド 身ヤ持チャリ
- 11. 白天バ クムラシ
 黒天バ アミナシ

雨が欲しくてこうしているから 水が欲しくてこうしているから

人間の体の持ち(保ち)は 水でこそ保たれる 青空を曇らして 黒空を雨にして

人間の育ちは

雨でこそ育つ

- 12. ニカヌ夜ヌ 夜ヌンチン ダラダラシ給リ
- 13. ユサヌ夜ヌ 夜ヌンチン ドーリドーリシ タボーリ
- 14. 升ヌカチ 満チキ田原カチ 満チキ
- 15. タウタウヤ 池ナシ
 スニスニヤ アブシィナシ
- 7ムヤナヌ 上カラ
 雨ウラシ タボーリ
- 17. 水本ヌ 上カラ 水ウルシ 給リ
- 18. 川良ヌチビンプルダショリ 山ブクン チキダシヨリ
- 19. ウラナートゥヤ 赤マシ 前ヌトゥヤ 水ナショリ

今夜の夜中じゅうだらだら(ゴウゴウ)と降らして下さい夜さり夜の夜中じゅうどーりと降らせて下さい

枡(田圃)ごと満たして

各田原も満たして

低地低地は池にして

高い所は畔にして

雨やなの上から

雨を降らせて下さい

水元の上から

水を降らせて下さい

川尻も掘り出して下さい

山腹も突き出して下さい

ウラナー渡 (川平湾) は赤くして

前の渡(海)は水にして下さい

雨とのつきあいを下さい とりつきあいを下さい

- この歌の内容は次のようになっている。
 - ② 実情
 - ・早魃で雨(水)が欲しくて困っている。
 - ・茅や芋葛も枯れている。
 - ③神の怒りを和らげる 私や先輩たちに悪い行いがあったとしても
 - ④降雨に至る過程 天を雲らす
 - ⑥雨の降り方

「ダラダラ」「ドーリドーリ」

- ⑧期待する降雨量
 - ・田圃の枡が満ち溢れる
 - ・谷間に池ができる
 - 高いところは畔となる
 - ・川下が深く掘り返す程
 - ・山腹が突き出る程
 - ・川平湾が泥水で赤くなる程
 - ・前の海が水に変わる程
- ※降雨願い(追加)

毎日雨と共に過ごし、雨と水の恩恵を受けることができるように

-9-

古見・川平両村の雨乞い歌は、ともに①神の名と⑦雨の降る時間帯の要素を欠くが、ほぼ基本的な構造が整った事例である。

2. 八重山古謡にみる雨の観念

(1)雨の本拠地

ニガイフチィや雨乞い歌の中では、基本的には雨の元は雲であり、雨雲が雨を降らせるという考え方である。その雨雲は南の島からやって来ると考えられていた。

登野城の「雨乞チィジィ」には次のようにある。

パイナーラヌ島カラ

南の方の七つの島から

親島ヌ上カラ

親島の上方から

〈ユバタボライシ〉

雨ヌ根ヌ黒ミキィン

水ヌ根ヌ黄ルミキィン

黒ミヤガリクル雨

バガ島ヌ上カイ

石垣島ヌ中カイ

夫婦雨給ボウラル

打組雨タボウラル

雨の根が真っ黒くなっている

水の根が暗黄色になってくる

真っ黒くなってくる雨雲

わが八重山の島の上方に

石垣島の全島の中へ

夫婦の豪雨を恵んで下さい

陰陽打組んで降る大雨を恵んで下さい

ここでは、パイナーラの島すなわち南の島から真っ黒い雨雲(雨の根)が我が八重山島の上空にやって来て、夫婦雨を降らせて欲しいと祈願している。宮良の「雨 乞チィジィ」でも、

パイノウラヌ ウイガラ

フッシメリ オールアミ

カンザキィヌ ウイガラ

アウシメリ オールミジィ

メーラムラ ウイゲタボリ

アダドゥーナー ウイゲタボリ

南方洋上から

黒くなって寄ってくる雨雲

神崎の上から

暗黄色で寄せてくる雨雲

宮良村の上に降って下さい

安多手村の上に降って下さい

とあり、同様な発想である。

黒島の「雨乞チィヂィ」は次のようにある。

1. 南ナーラヌ島カラ 立ツ雲

フシマニ 渡シ給ボウリ

2. ピキバレヌ島カラ 立ツヌリィ サフ島ニ 渡シタボウリ

3. 白保崎 立ツ雲

フシマニ 渡シタボウリ

4. 大島ヌ上カラ 立ツ雲

サフ島ニ 渡シタボウリ

南の島からわきたつ雨雲よ

どうかわが黒島に恵み給うように

ビギバレヌ島から立つ乗り雲よ

わがサフ島に降らし給え

白保村の崎から上ってくる雨雲よ

わが黒島に雨を降らし給え

大石垣島のかなたから立ってくる雨雲よ

わがサフ島に雨を恵み給え

- 5. 白雲バ 雨ナシタボウリ ヌリ雲バ 水ナシタボウリ
- 6. 丘々バ 引キィ下ルシタボウリ 丘々をば引き崩し トウトウバ 池ナシタボウリ 低地低地をば池に
- 豆蔓ン 枯リルン
 芋蔓ン 枯リルン
- 8. ドロドロシ タボウリ ザルザルシ タボウリ
- 2. 泣ク子ン 乳タボウリ ユム子ン 水タボウリ

黒島では、パイナーラの島からやってくる雲だけではなく、白保崎、石垣島上空に立つ雲も黒島上空の白雲・乗り雲を雨雲に替えて雨を降らせて欲しいと願う。黒島から見て石垣島は北にあり、南方の島と北の石垣島の双方からの雲を呼び寄せて雨を降らせて欲しいと願っているのである。黒島の雨乞いは最長 6 回に及び、最終の 6 回目はウムトゥダギを遙拝祈願するが、石垣島を意識しているのはこうしたことと関係があるのであろうか。なお末尾の句は、雨の神の慈愛を求めた比喩的表現として異色である。

八重山のほとんどの雨乞い歌では、パイノーラの島から雨雲がやって来て雨を降らせるとあるが、唯一東方の島と考えるのが鳩間島である。その雨乞い歌は次のようなものである。

- いんすくぬ りゅーがなし
 ハーリ アミタボリ リューガナシ
- 2. あんのーまーぬ しまから っふぁーみおーる あみ
- 3. しるくむば あみならし
- 4. ぬりくむば みじならし
- 5. ばがぱとぅま ぴきゆしおーり
- 6. くりとうむり とうりゆしおーり
- 7. にかぬゆーぬ ゆなかに
- 8. ゆさるゆーぬ ゆなかに
- 9. どうるどうるし たぼーらり
- 10. ざーらざーらし たぼーらり
- 11. むるむるぬ とうーなるけー
- 12. とうーとうーぬ いきなるけー
- 13. ぱまかざば うしうるし
- 14. いんぬりば ぴきうるし
- 15. まいぬとうーぬ やのーるけ

海底(ニライカナイに相当)の龍加那志

東の方の島から どんよりやって来る雨

白雲を雨になし

乗り雲を水になし

わが鳩間島に引き寄せなさり

これ友利に取り寄せなさり

今夜の夜の夜中に

夜去り夜の夜中に

ドゥルドゥルとたっぷり下さい

ザーラザーラと充分下さい

岡々が渡(海)になるまで

低地が池になるまで

浜葛を押しおろし

海苔を引きおろし

前の渡が濁るまで

16. にしぬとぅーぬ やのーるけ

17. うまんちゅぬ いぬちや

18. うんかざどう ぬちやる

19. うんかざぬ いぬちや

20. かきみじどう ぬちやる

21. まみかざぬ いぬちや

22. うてぃみじどう ぬちやる

23. うてぃみじぬ ねーなぶりば

24. かきみじぬ ねーなぶりば

25. まみかざん ないどうしゆーる

26. うんかざん ないどうしゆーる 内容を整理すると次のようになる。

①神の名

海底(ニライカナイ)の龍加那志

- ④降雨に至る過程
 - ・東方の島から黒い雲がやってくる。
 - ・白雲・乗り雲を雨雲に替えて引き寄せる。
- ⑤降雨地点

鳩間島 (友利島)

⑥雨の降り方

「ドゥルドゥル」「ザーラザーラ」

⑦雨の降る時間帯

今日の夜中

- ⑧期待する降雨量
 - ・岡々が海になるまで
 - ・低地が池になるまで
 - 海が濁るまで

※雨の必要性

人間の命である芋葛・豆葛は水がなければ萎える

鳩間島の場合は②③の要素を欠いている。鳩間島ではニライカナイに代わる言葉がインスクで、これは「海底」の意味である。海の底には龍加那志すなわち龍神が住んでいると考えられており⁽³⁾、その龍神に対して、東方の島から雨雲を鳩間島に引き寄せて欲しいと願う。雨の元島を「パイノーラぬ島」ではなく「アンノーマーぬ島」とするのは八重山では鳩間島のみである。

(2)雨の誕生

白保のニガイフチィ⁽⁴⁾には、雨の誕生に関する内容が含まれている。

1. 木生ヤパナ

山嶽の頂上におられる

北の渡が濁るまで

芋葛が命である

芋葛の命は

万民の命は

掛ける水が命である

豆葛の命は

落ち水が命である

落ち水がないので

掛ける水がないので

豆葛も萎えてしまう

芋葛も萎えてしまう

御殿主

〈雨ユタボウリ〉

 ヌリィヤパナ 御殿主

 3. 白雲ユ 御殿主

 4. 乗雲ユ 御殿主

 親知ラナ 腹持チ

6. 骨知ラナ 腹持ち

 出ディリ出ディリデ オウレー

 8. パリパリデ オーレー

10. 足ヌビヌニ
 ウリィケードゥ

11. 産リ月ヌ
キタラードゥ

12. 九月ヌ足リ月ヌ
キタラードゥ

 13. 白ルアイヌ 生レオウリ

14. 綾アイヌ産ディオウリ

 15. 天ヌ雲ン 乗リョウリ

16. 白雲ン 移リョウリ

17. 雨ヌ主ドゥ
ヤリオウル

18. 水ヌ主ドゥ
ヤリオウル

19. プタリ水ニ
降ラショウリ

御殿主(雨の神)よ〈雨を恵んで下さい〉

乗雲のかかる山岳に鎮まり給う神よ

御殿主(雨の神)よ

白雲におられる

雨神様よ

乗雲に鎮まり給う

雨の神様

親の知らないうちに 雨を妊娠している

母の知らないうちに

雨を孕んでいる

親は雨神と知らないで 追い出してしまった

ゆけゆけと

雨神をせめたてられたので

大本山の七滝のほとりに

家を出されて坐っておった

足を伸ばして おったところ

雨の降る臨月が

来たので

満九ヵ月の予定日が

来たので

白藍色(雨雲)が

生まれてきた

綾藍のような雨雲が

産でてきた

天の乗雲も

乗り出してきた

白雲も雨雲に

変わってきた

(これこそ) 雨の神様で

あられたのだ

水の神様で

あられたのだ

どうぞ柄杓の水のような雨を

降らして下さい

- 20. メマサ水ニ ハラショウリ
- 21. ドゥルドゥル 給ボラレ
- 22. 下田原満チャショウリ
- 23. トゥトゥン満チャショウリ
- 24. サクサクン満チャショウリ

内容は次のようになっている。

- ①白雲の中にいる雨神
- ※雨神誕生の話

〈親の知らないうちに妊娠〉 〈親から追い出される〉 〈木本山の七篇のほとりで出産

〈大本山の七滝のほとりで出産〉

⑥雨の降り方

「ドゥルドゥル」

- ⑧期待する降雨量
 - ・下田原の田圃を満たす
 - ・作地を満たす

ここで注目されるのは、5番~ 18番が雨神の誕生譚を語っていることである。雨乞いに関するニガイフチィや古謡に、親が知らないまに子を妊娠し、家を追い出されて川辺で出産した子が雨の子であったとする雨神誕生譚が見られる。波照間島の神行事クムリィで謡われるアマグイヌパンにも、神の子の誕生譚が謡われている(5)。パンとは祈りの意味であるが、メロディーを伴って謡われるので雨乞い歌と変わらない。このことに注目した保坂達雄は、雨を降らせるためには雨の神を誕生させることが必要であり、その誕生には女の孕みが前提となっていたとして、こうした観念の根底にはツカサの神婚譚があったのではないかと説く(6)。

八重山の雨乞い歌では「夫婦雨」という言葉がよく出てくるが、喜舎場永珣によれば、夫婦雨とは大雨のことであるという。人間の夫婦が子供を生んで増えていくように、夫婦雨から子の雨が生まれて大きな雨になると考えられていたと解説している⁽⁷⁾。しかし、男女が夫婦となって雨を降らせるという観念も見られる。

竹富島に「雨ぬ根」の「出羽」には次のようにある。(上勢頭亨『竹富島誌』〈歌謡・芸能篇〉法政大学出版局、1979年)

 くばんとうぬ いやなす 〈雨タボーレ〉 小波本御嶽の いやなす神

2. 大石垣 まるばい

大石垣御嶽の まるふぁい神

- 3. 枯乾ゆ しらりてぃ
- 4. ぴるぶしゆ しらりてぃ
- 5. 雨欲しゃぬ ならぬそ
- 6. 水欲しゃぬ ならぬそ
- 7. たんでぃとうとう いやなす
- 8. いきゃとうとう まるぱい
- 9. ばぬしまた ならぬそ
- 10. くりしまた ならぬそ
- 11. いやなすどう 雨ぬ主
- 12. まるぱいどう 水ぬ主
- 13. 嶽ぬ神に うたいし
- 14. 海ぬ神に うたいし
- 15. かにやどうゆ あき通し
- 16. 石やどうゆ あきとうし
- 17. 雨ぬ道ゆ あきとうし
- 18. 水ぬ道ゆ あきとうし
- 19. 雨俵ゆ 持ちゃいし
- 20. 水だーらゆ むちゃいし
- 21. ぱいぬうらぬ 島から
- 22. 風むとうぬ ふんから
- 23. みゆとう雨 くぬみょうり
- 24. ぐしく雨 くぬみょうり

と見えるが、「中羽」には次のようにある。

- 竹富ぬ 上なかよう
 〈ハーリョー 神加那志〉
- 2. 仲立ぬ 真頂よう
- 3. 大元から 引く水よう
- 4. やしるから 引く水よう
- 5. みゆとう雨ば いかいしみ
- 6. ぐしく雨ば とうりゃゆてぃ
- 7. どーるどーるとぅ たぼらりよう
- 8. さらさらとう たぼらりよう
- 9. かーかー 満ちあまりよう
- 10. 池々や 満ちあまりよう
- 11. たふたふや 池なしよう
- 12. むるむるや とうなしよう
- 13. 作る物や ないりよう
- 14. くんかずらや ないりよう

から干しを せられて

日干しを せられて

雨が欲しくて たまりません

水が欲しくて たまりません

どうかお願い いやなす神

どうにかお願い まるふぁい神

私ではまた できないよ

これ〔私〕ではまた できないよ

いやなす神が 雨の主

まるふぁい神が水の主

御嶽の神に 訴えて

海の神に 訴えて

鉄の屋戸を 開け放し

石の屋戸を 開け放し

雨の道を 開け放し

水の道を 開け放し

雨俵を 持ち出し

水俵を 持ち出し

南方の 島から

風元の 国から

夫婦雨を くわだててください

打組雨を くわだててください

竹富(島)の 上に

仲立(島)の 真頂に

於茂登岳から 流れる水

山城から 流れる水

夫婦雨を 行き合わせ

打組雨を 行き合わせ

ドールドールと 給われて

サラサラと 給われて

井戸ごと 満ちあまり

池々は 満ちあまり

低地低地は 池にして

岡々は 海にして

作物は 萎えて

くん葛は なえて

15. すくる物や いかしたぼり

16. くんかずらや いかしたぼり

17. 山々ぬ 司ぬよう

18. 村々ぬ 🍎 頭ぬよう

19. 願たむてぃ あらしょうり

20. 手ずるむてい あらしょうり

21. 足ぶがり 乞ゆらばよう

22. ひしゃぶがり くゆらばよう

23. くゆるむてぃ あらしょうり 乞うたことをもって 降らせてください

作物は 生かしてください

村々の女頭〔役職名〕が

足が疲れて 乞うたら ひざが疲れて 乞うたら

御嶽御嶽の司が

くん葛は 生かしてください

願ったように してください

祈願したように してください

祈願をもって 降らせてください

24. 手ずるむてぃ あらしょうり

この下線部分によれば、南の島で誕生した夫婦雨を、竹富島の上空で再び行き会わせて雨を降らせるように祈願している。

夫婦雨という言葉の裏には男女(雄雌)の結合によって誕生する雨という観念があることは言うまでもない。保坂達雄は宮古の狩俣で謡われている雨乞いクイチャー⁽⁸⁾に出てくる「雄雲・雌雲」という言葉にも注目している。

うるかにん うらまイ

砂川根におられる

みずうらん うらまイ

水裏におられる

かーぐにん うらまイ

井泉国におられる

あみぬぬシ みずぬぬシ

雨の主 水の主

いイがらー みーうむ

西からは雌雲東からは雄雲

あがイがらー びぎーぐむ ういがらー みーうむ

北からは雌雲

ぱいがらー びぎうむ

南からは雄雲

すなわち、水裏にいる、井泉国にいる雨の主・水の主に対して、東と南の雄雲と、西と北の雌雲を合体させて雨を降らせるよう祈願している。伊原間の「アマニガイヌフチ (雨願いの口)」にも女雨と男雨が夫婦となって大量の雨を降らせると見える。『伊原間村誌』から筆者の対訳によって挙げておく。

ピスニンギンマレ

人人間が生まれ

ナガペレシ

長く干ばつが続いて

アミタボラナテリ

雨を賜うことがなく

ピスニンギンヌン

人間も

ウシンマン

牛も馬も

トビイキムシン

飛ぶ生き物も

アミプサシ

雨が欲しいと

ミジプサシブリバ

水を欲しがっているので

パイハラワルアミン

南からやって来る雨

ニシハラワルアミン

北からやって来るた雨

イルハラワルアミン

西からやって来る雨

アルハラワルアミン

東からやって来る雨

ミアミ

ビヒアミ

<u>女雨と</u> 男雨が

ミユトシナシ

夫婦となって

タボリテリ

給わり (降って)

メマサミジヌ

大量の水が

ヒクンニン

引くように

ドルドルシ

ドルドルと

タボリテ

給わって(降って)下さいと お願いする

シサリルント ト

人間としての

ニンギンマリヌ ウグナイガタ

行い方を

シミタボリテ

させて下さって

シサリルン

お願いする

フサゾムクン

草や雑木も

シクレルムヌ

作れる物は

シクルン

作る

ウシンマン

牛も馬も

トビイキムシン

飛ぶ生き物も

ウグナイガタ

行い方を

シミタボリテ

させて

シサリルント ト

祈願します

シカイト

心から

ニンギンマレ

人間に生まれ

アミプサシド ブルユ

雨を欲しがっています

アミタボラシ

雨を降らせて

タボラバ

降らせて下さるなら

クル ルクンガチヌ

来る六月に(豊年祭で)

プパナアギナ

穂花を捧げましょう

キユシサリタルウスベ

今日祈願したことを

アギシサリルント ト

感謝し奉ります

ツカサがノートに書き留めあったという、このニガイヌフチは東西南北からやってくる雌雄の雨が夫婦となって沛然と雨が降るとする点が独特である。

(3)雨の閉じ込め

大川村の「雨乞チィジィ」は次のようなものである。

1. 南七ヌ島カラ

南ナーラの島から

〈ハーリヌ雨給ボウリ〉

水元の島から

水元ヌフンカラ

 石雨戸ユ パネアケ 金雨戸ユ キリアケ

- 3. 黒ミヤーガリ 給ボウラル 白ミヤーガリ 給ボウラル
- 4. 海ナラン 給ボウラル 山ナラン 給ボウラル
- がお島ヌ 上ナカ
 親島ヌチヂィナカ

石の雨戸をはねあけて 鉄の雨戸を切開けて

黒い雨雲をお恵み下さい 白い叢雲よ水をお恵み下さい

海鳴りするような大雨を

山鳴りがするほどの豪雨をお恵み下さい

我が島の上に

親島の頭上にお恵みのほどを

この歌では、パイナーラの島から雨戸を切り開けて海鳴り山鳴りするような豪雨を我が島の上に降らせて下さいと謡っている。興味深いのは、雨が降らないのは、戸の奥に雨が閉じ込められているからという考えである。

この意味がよく表れているのが宮良の「スバンガーニカンフチィ」(『宮良村誌』 宮良公民館、1986年)である。

- 1. ティンヌカンガナシィ アミフシャヌ 天の神様、雨が欲しい ミジィムトゥヌカンガナシィ ミジィフシャヌ 水元の神様、水が欲しい
- 2. ウフヌガヤン カリドゥフゥ スクルカザン ピチリドゥフゥ
- 3. ナユトゥガミドゥ アミタボーラヌ イカトゥガミドゥ ミジィタボーラヌ
- 4. アミサアリド ヌチンムサーリ ミジィサーリドゥ ドゥユムサーリ
- 5. タンディトードゥ ウフカンヌマイ ドーデンスーサル テンガナシマイ
- 6. スバガーニバタボリ カンヌマイ カンカザバタボリ ウイガナス
- 7. アミヌミチユ アキトウシ ミジィヌミチユ アキトウシ
- 8. ハイノーラヌ ウイガラ カジムトゥヌ カンガラ
- 9. アミダーラユ ムチオーリ ミジィダーラユ ウシオーリ
- 10. ミユトゥアミユ ムチオーリトジブドゥアミユ ウシオーリ
- 11. シラクムヤ アミナシ ムリクムヤ ミジィナシ
- 12. カアラユン ンチャショウリトートーユン アバショウリ

大野原の茅も枯れている

何の科があって雨が降らないのか いかなる罪があって水が無いのか

雨があってこそ命も保てる 水があってこそ体も維持できる

お願いします大神の前

作物の葛も消滅する

最上のお願いです、天加那志様

スバニガニ葛を下さい、神様

神葛を下さい水の神様

雨の道を開け通して下さい

水の道を開削して下さい

南方の洋上から

風の本の国から

雨の俵を持ってきて下さい

水の俵を運んで下さい

夫婦雨を持ってきて下さい

妻夫雨を運んで下さい

白雲は慈雨にして下さい

群れ雲は潤水にして下さい

川も満水にして下さい

低地も溢れさせて下さい

- 13. カタラヌチビン アカマシタボリ マイヌトゥユン ヤンナシタボリ
- 14. ニゴタクトゥ アラヒタボリ ティズルムティ カナヒタボリ
- 15. メーラムラ ウイゲータボリ カンムラヌ ウイゲータボリ
- 16. ユガフユーヤ アミドゥユー カフヌユーヤ ミジィドゥユー
- この内容を整理すると次のようになる。
 - ①神の名

天の雨神

② 実情

大野原の茅・作物の葛が枯れている

③神の怒りを和らげる

人間にどんな罪(科)があって雨を降らせないのか

- ④降雨に至る過程
 - ・雨の道を開ける
 - ・ハイノーラ(南方)の国(風本の国)から雨の俵を持ってくる
 - ・夫婦雨 (男女雨) を運ぶ
 - ・雲を雨に替える
- ⑧期待する降雨量
 - ・川を満たす
 - ・低地を満水にする
 - ・川尻を濁らす
 - ・前の渡(海)を濁らす
- ⑤降雨地点

宮良村(神村)

※雨の効果

世果報

ここでは雨の道(水の道)を開け、雨(水)の俵を運んでくるとあり⁽⁹⁾、これまで雨の道が閉じられていたことになる。「何の科があって雨が降らないのか」と問うていることと合わせて考えると、天の神(雨神)が人間の犯した罪に怒って戸を閉めたということになる。

小浜島の「雨乞い歌」は若干異なっている。

- いつやまぬ うやかん
 アミフシャヌ アミフシャヌ
- 2. ななやまぬ まもるそー
- 3. にんがいまーり しさる

五山の親神 雨が欲しい、雨が欲しい 七山の守る神 願い巡って申し上げます

川良の尻も濁らせて下さい 前の渡も濁らせて下さい 祈願を聞き入れて下さい 手摺るの願いを叶えて下さい 宮良村の上に降雨させて下さい 神の村の上に降雨させて下さい 世果報世は雨が本 果報世は水が本

- 4. ちぢりまーり うよさば
- 5. しきとりて たぼり
- 6. うきとりてい たぼり
- 7. あみふっさー しうりば
- 8. みじふっさー しうりば
- 9. あみさーりど たつありる
- 10. みんちぃさーりどう うらりる
- 11. みふっさし ゆみとーし
- 12. みんちぃふっさし なきとーし
- 13. つきぬみつき なるんけ
- 14. ぴぬむむか いくんけ
- 15. まみかざん かりどす
- 16. あこんかざん かりどす
- 17. かんだむーどう やりば
- 18. のんだむちど やりば
- 19. あんつあ まーしたぼり
- 20. あぶし まーしたぼり
- 21. てぃんみいなか あるあみ
- 22. ういみいなか あるみず
- 23. いつふくろ とうりあき
- 24. ななふくろ とうりあき
- 25. ちりくむや あみなし
- 26. ないふむや みじなし
- 27. なうらたきぬ ういから
- 28. よならたきぬ ういから
- 29. あみむよーば くぬみわり
- 30. みじむよーば くぬみわり
- 31. ばがくもーま ういなか
- 32. なかずにぬ ういなか
- 33. にかぬゆぬ ゆるから
- 34. ゆすぬゆーぬ にかから
- 35. ぞーるぞーるし たぼーり
- 36. さらさらし たぼーり
- この内容を整理すると次のようになる。
 - ①神の名を呼ぶ

五山(七山)の親神

②実情

・雨あってこそ生活していけるが三ヵ月も雨が降らない

手摺りし巡って申しますから

聞き取って下さい

受け取って下さい

雨欲しくしているから

水欲しくしているから

雨でこそ立てる(生活できる)

水でこそおられる

雨が欲しくて言いつづけ

水が欲しくて泣きつづけ

月の三ヶ月なるまで

日の百日なるまで

豆葛も枯れる

芋葛も枯れる

カンダームードゥ(不明)であるから

ノンダムチ (不明) であるから

畦に廻して下さい

是に廻して下さい

天の庭にある雨

上の庭にある水

五袋を取り開け

七袋を取り開け

白雲は雨にして

乗り雲は水にして

ナウラ嶽の上から

与那良嶽の上から

雨模様をつくりなさって

水模様をつくりなさって

我が小浜島の上に

仲宗根の上に

今夜の夜の夜から

ほかの夜の夜から

ゾールゾールと(雨を)下さい

サラサラと (雨を) 下さい

- ・雨が欲しくて毎日泣き続けている
- ・豆葛も芋葛も枯れている
- ④降雨に至る過程
 - ・天の庭にある雨
 - ・五袋・七袋を開ける
 - ・白雲を雨に、乗り雲を水に替える
- ⑤降雨地点

小浜島(仲宗根)の上

⑦雨の降る時間帯

今日の夜中

⑥雨の降り方

「ゾウルゾウル」「サラサラ」

小浜島の場合、パイナーラぬ島という発想はなく、雨は天の庭に袋に詰められて保管されていると考え、その5つか7つの袋を開けて、白雲・乗り雲を雨雲に替え雨を降らせて欲しいと願う。宮良の「スバンガーニ カンフチィ」や竹富島の「雨の根」では「雨(水)の俵」という言葉が出てくるが、それと同じ発想である。しかし雨の所在を天の庭と考えるのは八重山では小浜島以外にない(10)。

おわりに

本稿では主に八重山諸島における雨乞いのニガイフチィ(またはカンフチィ)と雨乞い歌を分析検討したが、これらはの資料は、もともと口頭で伝承されてきたものを、戦後、特に1960年代から70年代にかけて地元の研究者が文字によって書き残したものである。旱魃の時に不定期に行われる雨乞い儀礼であるから、伝承の過程で、言葉や表現または順序などにおいて省略や誤伝が生じることも考えられ、活字化された資料も完全な形であるとは言えないかも知れない。

八重山諸島全体として見た場合、雨乞いニガイフチィや雨乞い歌の基本的な構造はほぼ同じであるが、雨の観念は必ずしも均一ではない。例えば、八重山では雨はパイノーラの島すなわち南方の島からやって来るという考えが一般的だが、鳩間島のように東方の島とするところもある。また波照間島と石垣島の白保の雨乞い歌によれば、親を知らない子が生まれて雨の神となり雨をもたらすという考えがあったことがわかる。保坂達雄はその古層には、神との交感があり、女の孕みなくしては雨の神は誕生せず、雨の神なくしては雨はもたらされないという民俗観念があったと説く。しかしそれ以外の島では、雨は雌雄の雲が合体し真っ黒い雨雲が生まれ、それがさらに白雲・乗り雲を抱き込んで雨を降らせると謡われることが多い。これを保坂は雨乞い信仰の時代的変遷の過程で変容したものと述べるが、同時代資料を分析する中で、どれを古層的観念とし、どれを変容と見るかの判断はきわめて困難であろう。八重山諸島の雨乞い歌には、雨神の誕生譚とは異なるもう一つの観念が

存在する。それは、雨が降らないのは、神が人間の犯した罪に怒っているからだという考えである。すなわち神が怒って雨の道を固い石や鉄の戸で塞いでしまったため雨が地上に降らなくなってしまったというのである。『古事記』『日本書紀』に見える天照大神の天の岩戸隠れ神話を連想させるものであるが、雨は袋に詰められて雨戸の奥に封じ込められていて、その雨戸を開け、雨の袋を持ち出して雨を降らせるという。こうした考えは八重山の人々が独自に考えだしたものか、あるいは誰かが外から持ち込んだ知識か、にわかに判断しづらいが、いずれにしても八重山諸島の雨乞い歌には雨神誕生譚以外にも、さまざまな要素が複合的に取り込まれていることがわかる。

注

- (1) 喜舎場永珣『八重山古謡』(沖縄タイムス社、1970年)、瀬名波長宣『八重山小話』(沖縄春秋社、1973年)、外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成 IV八重山篇』(角川書店、1979年)、『伊原間村誌』(伊原間公民館、1993年)。なお本文中に引用した古謡は、特に断らない限り喜舎場永珣『八重山古謡』に依る。
- (2) 川平の雨乞いは、①ウガンマーリ(御嶽廻り)、②「火焚き」、③アマユナー祈願の段階を踏むが、「雨乞いユンタ」は①と③の場面で謡われる。①のウガンマーリは、各戸から一人づつ、50歳以上の男が香花(線香とお米)を持って集まり、司を先頭に各御嶽を廻って祈願する。特に宮鳥御嶽では、司たちが円陣をなして、「雨乞いユンタ」を謡いながら、中央に置かれた水を満たしたたらいの水をマーニの葉で跳ね上げる動作を繰り返す、クイと称する祈願を行う。
 - ③のアマユナー祈願では、宮鳥御嶽の司と、50歳から60歳の女9人(一人は水性の人)が水元とされるアマユナー(大嵩山林の山奥にある滝)に出かけ、滝つぼの水の中で祈願を行った後、つる草を両手に持って水に浸しては頭上に持ち上げる仕草を繰り返しながら「雨乞いユンタ」を謡う(アマユナーにおけるクイ)。そして雨乞いユンタを謡いながら山を下り、今度は、川平湾の海中に9人が横一列になって腰のあたりまで浸り、「雨乞いユンタ」を謡いながらスバ(大かずらとトウズルモドキを綯ったもの)を両手で持ち上げるクイの行事を行った後、川平湾の西海岸沿いに進んで、アマユナーの水の神を部落に迎え入れる。

このアマユナー雨乞いについては伝説が残っている。その昔、大屋家の先祖は猪を捕りに山に入った。山奥のアマユナー近くの滝つぼの方から歌声が聞こえてきたので、こっそり近寄ってみると、滝つぼにはこの世の人ではない神様が「雨乞いユンタ」を謡っていた。神はすぐに人間の存在に気づき、「なぜ人間がこの神聖な場所にきておるのか」と詰問すると、「旱魃で食べる物がなく、猪を捕りに来た」と言うと、神は「雨乞いユンタ」を謡い、神に祈願すれば願

い が叶えられる」と言って「雨乞いユンタ」を教えた。村に帰り、そのことを 村 人に伝え、御嶽で「雨乞いユンタ」を謡って祈願すると、たちまち大雨が降

った。以来、雨が降らない時はアマユナー祈願が行われるようになったという (『川平村の歴史』〈川平公民館、1976年〉)。

アマユナーの滝つぼで神が謡っていたという「雨乞いユンタ」がいかなるものであったかは知る術もないが、現在伝承されている「雨乞いユンタ」は、御嶽の神およびイビの神を通して慈雨を乞う内容になっている。

- (3) 鳩間島のパーレ(船漕ぎ競争)で、競争を終え浜に揚げられた船の間を廻りながら謡われる「ゆーあぎジラマ」(『鳩間島』沖縄在鳩間郷友会、1983年)には、
 - 1. いんすくぬ まぶりしゅ まいぬぱまぬ うやがみ
 - ばがぱとうまに あがりょうり くりとうむりに うつりょうり (以下略)

海の底の守護神 前の浜のおやがみ 我が鳩間島に 上がって下さい これ友利に移って下さい

と「海の底の守り神」とあるが、これは水を司る龍神のことと考えられている。

- (4)『八重山古謡』では「雨チィジィ」として掲載されているが、『八重山小話』では「願口」となっており、『南島歌謡大成』も「ニガイフチィ」に分類している。ここでは『八重山古謡』のものを掲げる。
- (5) 波照間島では年中行事として雨乞い儀礼が8回行われる。「雨ニゲ朝ニゲ(雨願い朝願い)」が旧暦11月に3回(但し3回目は大旱魃の時のみ)と翌年3月に1回、「クムリィ(籠もり)」が旧暦12月の「三日クムリィ」、翌年2月の「五日クムリィ」、4月の「七日クムリィ」の3回あり、5月の「アミジワー」をもって終了する。クムリィの時に謡われるアマグイヌパン(雨乞いのパン)の中に秘密の部分があるという。『HATERUMA』(コルネリウス・アウエハント著・中鉢良護訳、榕樹書林、2004年)には次のような標準語訳が紹介されている。
 - 1 (彼女は)父がわからぬ子を持ち
 - 2 男がわからぬまま孕み
 - 3 行くところはどこにもなかった
 - 4 入るところはどこにもなかった
 - 5 井戸の端にたどりついて
 - 6 水の端で、彼女は(時を)過ごした
 - 7 生まれる月がやってきて
 - 8 出産の月がやってきて
 - 9 (子供の)腕が出て
 - 10 (子供の) 足が伸び
 - 11 新たに生まれた子が坐った
 - 12 坐っ子が這い

- 13 這った子が立ち
- 14 立った子が歩いた
- 15 まさに神の子でした
- 16 まさに上の子でした
- 17 中の空(夏の雲)に乗っているのが父親でした
- 18 高い空(夏の雲)に乗っているのが男親でした
- 19 (子は) 五つの(天の)窪みに昇っていかれた
- 20 (子は) 七つの (天の) 窪みに昇っていかれた
- 21 五つの (天の) 窪みに坐り
- 22 七つの (天の) 窪みに坐り
- 23 五つの (天の) 窪みの主になられた
- 24 七つの (天の) 窪みの主になられた
- 25 島に雨を、私達(神司)はあなたがたにお願いします
- 26 土地に雨を、私達(神司)はあなたがたに請い願います
- (6)保坂達雄「誕生と降雨 雨乞い謡における観念の古層 」(明治大学『古代 学研究所紀要』第6号)
- (7) 喜舎場永珣『八重山古謡』(前掲注(1)) 上巻P.300~301
- (8) 狩俣の「雨乞いのクイチャー」は、さまざまな神の名を揚げて祈雨を乞う内容であることから「神名揚げクイチャー」とも呼ばれる(上原孝三「クイチャー覚書」『沖縄尚学高等学校紀要』 2)。
- (9) 前掲の竹富島の「雨の根」(出羽) にも、

かにやどうゆ あき通し 石やどうゆ あきとうし 雨ぬ道ゆ あきとうし 水ぬ道ゆ あきとうし

石の屋戸を 開け放し 雨の道を 開け放し

鉄の屋戸を 開け放し

雨俵ゆ 持ちゃいし

水の道を 開け放し 雨俵を 持ち出し

水だーらゆ むちゃいし

水俵を 持ち出し

と、似たような歌詞が見えるが、これには「神の怒りを和らげる」の部分はない。

(10) 沖縄諸島では、伊是名村や久米島の雨乞いのオタカベ(『琉球国由来記』・

『久米島仲里旧記』)に「天のみや、雨のみや」という言葉が出てくる。

例えば『南島歌謡大成 I沖縄篇上』〈角川書店、1979年)には、久米島仲里間切比屋定村の「右同時〔大雨乞之時〕比屋定村志村のおひや家おへい井まんせたうとまりニ而御たかへ言」の当該箇所前後の節について、次のような対訳を付している。

雨おろちへたまふれ

雨を降ろして下さい

いぶおろちへたまふれ

いぶを降ろして下さい

天のみやの かうじやしゆ

天の庭のカウジヤ主

雨のみやの かうじやしゆ 天の庭のカウジヤ主

井くちたてきるな 井口を塞ぐな

井はなたてきろな 井端を塞ぐな

井くちひろくあけて 井口を広く開けて

井はなひろくあけて井端を広く開けて雨おろちへたまふれ雨を降ろして下さい

ここでは「あめのみや」は「天の庭」「雨の庭」と訳している。ところが谷川 健一は、与那国島で虹を「アミヌミャー(雨を呑むもの)」と呼ぶことを手が かりに、この語は「あめ・のみや」すなわち「雨を呑むもの」と読み、龍、そ の化身の虹のことと解すべきであるとし、オタカベ、クェーナにおけるマジナ イ言の事例の一つに挙げている(『南島文学発生論』(思潮社、1991年) P.66 ~72)。谷川のこうした解釈は宮良当壮の「虹の語学的研究」(『宮良當壮全 集』13、第一書房、1981年)に基づいている。宮良は、宮古島では虹を「ティ ン・バウ(天の蛇)」と呼び、蛇がいない八重山の小浜島では虹を「ティンヌ ・ミマンチィ (天の蚯蚓)」が転訛したとみられる「チネー・ミマンチィ」と 称していることから虹は天上の蛇と信じられていたことを指摘する。そして青 大将を意味するアウナジィおよびウナギ(鰻)の語から蛇類の総称ナギが虹の 語源であるとした。さらに、八重山の新城島では、虹を「アミファイ・ムヌ(雨 を食ふもの)」と言い、「雨が降らうとして降らなければ、虹がこれを喰った と云ひ、又其虹は大龍の化身で、そして大龍は蛇の千年の歳月を経過したもの だと信じてゐる」と、千年蛇を龍との関係を指摘している。しかし「石垣島の 民間信仰では、雨を飲むと云ふよりも、むしろ河海若くは井戸水を飲み干すも のだと云われてゐる」とも述べているように、石垣島では雨と虹との関係はほ とんどなく、八重山各地の雨乞い歌などには虹(龍)を意識した「アミ・ヌミ ャー」語は出てこない。「アミヌ・ミヤ」は小浜島の雨乞い歌にあるように「テ ィンヌ・ミナカ」と同じ意味に解すべきであろう。